巳年の民俗

島田静雄

み年にちなんで蛇龍についての民俗を探つてみる。

夏の田舎道で殺された青大将の惨屍をよく見かける。蛇をみつけたら殺したくなるという心理を学者はこう説明している。

太古、人間が敵獣を防ぐために樹上生活をしていた頃、どうしても撃退できなかつたのは蛇であつた。その当時からの怨敵に対する感情が承継されて今日に至つたので見つけたら殺さずには居られないというのである。

そしてあらゆる悪魔鬼神を蛇が代表されてしまつた。若狭日向の寒流綱切りも海の悪神退治で豊漁を祈るためのものであり、諸所に於ける神前の綱切神事、綱引、駮馬寺の竹切も実は蛇なのである。古伝のオロチ退治はオロチョン族退治だと解することは無理でもないがやはり強敵異民族退治である。

○

ところが蛇に対する恐怖心が限度を超すと逆に神として崇める様になる。上志比村竹原の白龍弁財天は最近の創建であるが神体は生きた蛇である。岩のスキ間を利用した蛇の安息所なのである。昨日は黒神様、今日は異色の白神様だつたなど随喜の涙で喜ぶ者もある。背面は黒く腹は白く見えるに過ぎない。弁財天、黄金との関係については後説するが水と関係するからで、白龍の龍とは蛇の神格化された想像上の仮獣で支那渡来の伝説である。

一昨年勝山市新在家部落の道場改築にあたつて天井から、径二十糎、長さ十二米の左よりの藁縄製の龍体が現れた。その上中体部に四対の一米位の脚があり、その先きは球形となり所謂宝珠を表している。いろ〳〵とりさだされたがこれは防火目的の呪物である龍体である。この製作年代を知る古老は一人もなく、このマジナイの民俗も消えている。ところが今年の秋同市森川の本行寺の改築に当つて長短の差はあるが同一物が発見されて民俗研究家を喜ばせたのだつた。即ち現物により消滅した民俗を知り得たのであつた。

○

古唐書に龍には九子ありとしてその性質と使用場所を定めている。曰く(1)ポオロウ　大声高音と好むによつて鐘に用いる、(2)シウグウ　音楽を好むにより琴鼓に用いる、(3)チョウホン　液体を好むので盃盞瓶子などの容器に用いる、(4)シツブツ　冒険を好むので堂塔楼閣に用いる、(5)シロシイ　殺生を好むので青龍刀の如く刀剣槍などに用いる、(6)ハカ　風流韻事を好むので文具印材に用いる、(7)ヒイカン　訴訟を好むので官衛、裁判所などの門扉に用いる、(8)ヒイゲン　猛勇であるが無精で坐臥を好む

ので椅子、卓、曲ろく等に用いる、(9)フウキィ　重量に耐えるので、墓石の置台、金輪の足、銅炉等に用いる、と。

九頭龍はこの九字の総合に外ならない。

○

今年の夏の昼書見をしていると書斉の鴨居に大鼠が一疋たたずんで動かないのを見付けた。シーッと追っても静止している。立つて近づいても泰然としている。不思議に思つて出入口を探すべく鴨居を見やるとナント大青大将が赤い二枚舌をペロ〳〵させて迫つている。即ち鼠は蛇の魔力で催眠術にかかつていることを覚つた。蛇の舌は動物の触覚器だとは聞いていたがこのほどの魔力ありとは知らなかつた。前述太古代の樹上生活の人間もこの魔睡のギセイになつたことの想像も許されていいとも考えた。

○

反鼻とは漢方名のマムシである。これは精力剤であつて治病の効はない。ロクマクにはカラスヘビとて三四十糎の細い真黒なのが奏効する由。その他ヌケガラはゴマの花と練つてソバカス除去に効ありと処法に示している。

その他医療外にはネクタイ、財布などワニ皮様に使用されるので養蛇の職人もある。蛇取りの方法に二つある。一は米俵のサンダワラを二つ重ねて中心を貫通止めてその中に酒粕を中心に挟んだものを山野の所々に置き、翌日それを見廻るのであるが、マムシが首を突きこんで粕を食べ、酔つてサンドワラの中に渦をまいているのを捕えるという。

その二は越中立山高原での蛇（ウワバミ）とりの話。

頂上近くの笹原の中に小屋を建て炉を作つて味噌を焼き、之を中心に十米位離れて数ケ所に穴を掘つて身を隠して見張つていると、笹の葉がユラグのでエモノの到来がわかる。味噌の臭を好む蛇は小屋近くに到ると要心深い彼は首をもたげて四辺を見廻わす、そこを狙つて発砲して打ちとるのだという。

これらの製品を売る大道商人が毒蛇の生物を首に巻いたり、フトコロに入れて馴れ〳〵しくしているのをよく見かける。この取扱いにコツがある。蛇から自由を奪うには尾部を手で逆にウロコを撫でるのだそうでこの上手なのをニガテという由。苦手の語源が蛇から生れたことは最近の知得である。

○

女性が野山で立小便していると蛇が尿流を伝つて腹の中へはいつたという話は子供の時分よく耳にした話だつた。恐ろしい現象だとは思われたがこのナゾが解けずに今日に至つた。ところが古民俗を探るために日本随筆全集を漁つていたら次の記録を発見した。

妙齢の女性がとある石垣の側で石垣に向つてたたずんで動かない。通り合わせた男性が理由をたづねると腹痛だという。では帰宅したらとすゝめるが動けないのだという。痛さのあまり動けないという様子でもなさそうだ。そして直視している石垣を見ると石の間から蛇が顔を出して之も彼女を直視している。正に蛇の魔性のとりこになつているのだ。そこで通りがかりの男性が持つた鎌で首をはねたところ彼女は何の苦もなく正気に返つた。と。

彼女の腹痛は病気ではなく性の充足感で三昧境に陥ちていたのであつた。これ以上の説明は要あるまい。

木の枝などに雌雄両蛇が縄になつている

のもよく見かける彼等の世界で、深山の藤などの巻きついた木は杣夫は決して切らない。琉球でネンスクというのはこの木を切つて道祖神の傍に供えておくのも立川流仏教の歓喜天と同断であろう。

十七年目にしか開張されないためがこの事実がカンヅメにされているのでミ年にあたつて語ることも民俗界のために無駄でもあるまい。（三十九年十二月二十日誌）

○

小浜市矢代部落に余り知られない観音堂がある。ここの聖観音木像の両耳下に一対のヌエの彫刻がヨウラクの様に下がつている。

このヌエは頭が猿、胴が虎、尾が蛇という珍奇な怪物で全国唯一基の仏体である。

これは平家物語などが伝える、源三位頼政が宮中でこのヌエ退治をして近衛天皇の御悩を救い奉つた効により矢代部落を含む宮川の庄を賜り私領したので、その娘が聟と共に平家の圧力を感じて此処へ隠棲し頼政の霊を祀るために聖観音像にヌエを附加してその功を伝えんとしたもので頼政の墓も宮川に在る。

ノイローゼの近衛天皇が連日このヌエの鳴き声に快悩される時刻が記録を見ると申の刻に始り、寅の刻に最もひどく、巳の刻に至つて止むことから猿・虎・蛇の怪物が生れたのである。